

霧隠軒より折々によせて（第三回）

『禅に通じるジャズのこころ』

先月中旬、本場のジャズを正眼短大の公堂で初めて雲水や学生達たちと共に聴いた。それこそ「乗り」は悪くとも概おぼね好評だった。

彼らはアメリカジャズ界の超一流の演奏家である。又そのリーダーは禅の修行体験もあって、リラックスした演奏だけでなく、自然で流暢りゅうじやうな日本語には驚かされた。

しかし、小柄わたしが本当に關心した事は、彼らの演奏が終了した後の雑談の中にある。

つまり、小柄は聴いていて幾つかの感慨かんがいや疑問を抱いたのだが、先まず演奏が楽譜なしで行われていること。ジャズは大半がその場での創作、創造の結果で、二度と同じ演奏がされないのだという初歩的発見を、疑問として彼らに質問してみた。

すると「その通りで、喩たとえて言えばわれわれは演奏し

ながら会話をしている、結局皆で一つの話の構成をしていくようなものです」とリーダーが答えた。

そこで「では誰かが話の方向を示すと、皆がそうだろうだと連られていくのだろうが、時にはいやそうではない。それは厭だという場面もあるのでは」と更に聞くと「そういうことはない。それがわれわれの心の交流なのだ」と答えて、彼は皆に通訳した。

すると哲学的風貌の持ち主のベース奏者が「いや、そういうことは良くあるよ」と素直に言ったものだから皆大爆笑であった。そうして彼らは続けた。

「われわれはジャズという川の流れの中で浮いているようなもの。一人ひとりの前には扉があつて、それに遮られてなかなか流れに乗ることは出来ない。だがその扉を開ける努力が技術の向上で、いつか扉が開ききつて初めて、演奏らしい演奏が始まる。しかしそれでは不十分なのだ。扉が開いてもその枠がある限り真の演奏は出来ない。そこで何かのきっかけでこの枠が無くなると、今

迄<sup>まで</sup>一人ではどうしても出来なかった技や表現が皆の力でできるのですよ」と言う。

ここまで聞いて小柄はびっくりして「禅そのものだね」と応<sup>こた</sup>えると「同感です。彼は全く禅の本を読んでいないと思いますが、われわれも初めてこのことを聞きました」とリーダーが言った。

彼らは日本中をレンタカーを借りて旅をする。狭い車に身<sup>からだ</sup>体を押し込んで、楽器と一緒に移動し演奏して歩く。苦行僧のような生活だ。それでも演奏中も含め皆本当に楽しそうである。

技術を向上させることで自分の前に立ち塞<sup>ふさ</sup>がる障<sup>しょう</sup>碍<sup>がい</sup>を取り除くことは出来る。しかし自分で造っている枠を打ち破るのは至難なことなのだと言<sup>い</sup>はう。

そうしてこの枠を超えなければ、自然と一体となった働き、つまり真の演奏である心と心の交流はできるものではないと断言するのだ。

だからこそ、その限界からもう一段の努力精進をする

意味と、その喜びを彼らは知っているということだ。

これを「**禅**」そのものと、小柄は表現した。